

「インターメディアム、顔、ポストアウラ」

例年であれば、本ゼミはオープンキャンパスを舞台にした展覧会演習として、学びの場を設定している。しかし、本年はコロナウイルス感染症拡大を抑制するため、オープンキャンパスも中止となり、オンラインゼミを開講することとなった。世界全体を巻き込んだ社会的変動のなかで、新しい表現を模索しよう。ゼミでは、メディア論と間媒体性の考え方をレクチャーし、「顔」をテーマに制作する。ただし作品は、郵便あるいは何らかの電信によってゼミのメンバーへと送れるものとする。

コロナ以降に衰退したメディア/流行したメディア、活用され始めた技術を分析すれば、私たちの社会におけるコミュニケーション様態がどのように変化したのかがわかる。いまアートを思考するのに有効なのは、まずはメディア論である。本ゼミでは、メディア論としてヴィレム・フルッサー『テクノコードの誕生 —コミュニケーション学序説』（東京大学出版会、1997）を取りあげる。



<https://youtu.be/cQ54GDm1eL0>

コロナウイルスは、人が自由に集い交流する場の活性を著しく妨げている。それは、無症状者や軽症者など、症状が判別しにくいことによって感染者にしばった社会隔離が困難なため、密集する行動全般を抑制しなければならないからだ。近代主義社会を根底で支えている〈集会の自由〉は、緊急事態のさなかで解除され、美術における〈市民に開かれた展覧会/美術館〉という近代の概念装置もまた、無効となっている。大衆を動員せんとするモデルは機能しない。中世のように、貴族やエリートあるいは教会が美術を独占していた時代もあったが、コロナ以降の芸術が、例え

ば美術館やギャラリーがアポイント制を導入するように、閉じられたシステムへと変わってゆくかもしれない。コロナウィルスの拡大を機に、一挙に社会の情報化が進展するにせよ、そこで問題になるのは[inclusive/exclusive=包摂/排他]である。要は「いかに開く/閉じるか」。

ヨーロッパで感染が拡大しはじめたとき、大学（もまた近代の概念装置だ）では、オンラインレクチャーの導入が即座に行われた。ZOOMなど使われはじめたWeb会議アプリケーションは、参加者の顔を併置し、100-300人規模の双方向対話をオンラインで可能にするものだ。100-300人規模とは、一つの部族、軍隊の一個中隊、学校の一学年に相当する。この密に組織化する社会集団を実現している基本は、ダンバー数（Dunbar's number: 命令や規律あるいはノルマ無しに、人間が安定的な社会関係を維持できるとされる人数の脳の認知的な上限。150人程度。）として知られている。ここでいう社会関係とは、ある個人が、各人の事を知っていて、さらに、各人がお互いにどのような関係にあるのかも知っている、ということを示している。この集団数が成立するためには、人が密集することで高い利益が得られ、自給自足の村落のように厳しい生存圧に晒されていることが必要だという。大学という場もまた、基本的には、学術や専門研究を共同で高め合う社会空間といえるだろう。大学においてWeb会議アプリの流行が意味するものとは、私たちの社会が対面による中人数規模のコミュニティを喪失しかけている、ということだ。（ちなみにダンバーによれば、SNSにおけるダンバー数は減少すると述べている。つまり、ネットでは物理現実より交友できる人数は減る。）

アトリエや工房を備えた美大という場合は、人が密に集り、制作を共有することで学びを高め合う機能を持っている。私たちは、感染症が収束するまでの当分の間、共に学ぶ場を別様な形で獲得せねばならない。アトリエの働きの代替として、Web会議アプリが、何を果たしうるのか、オンラインゼミをとおして見極めねばならないだろう。また他のメディア（ex. 郵便・電信）の働きを再活用する方法も模索したい。このように大学とWeb会議アプリの在り様を考えてみたとき、興味深いモチーフとして浮かび上がってくるのは「顔」である。なぜならWeb会議アプリにおいて、コミュニケーションのインタフェースとなるのは文字通り「FACE:顔」だからだ。

150人規模のコミュニティを支えているのは対面、すなわち「顔」によって媒介されたコミュニケーションである。Web会議アプリにおいては、視覚的には「顔」が前景化する。このさいに問いとなるのは以下のようなになる。「画像化した顔によって、私たちのコミュニケーションはどのように変わるのか？」

既に私たちはコンピューターやスマホそしてSNSを介して「顔」というモチーフを変容させてきた。いくつかのテクノロジーをあげてみよう。顔検出/顔認証システムは、カメラがとらえた対象空間から顔をコード化する。「SNOW」のような様々なエフェクトを持つカメラアプリは、顔を画像のマトリクスへと自動的に繰り込む。顔において、その人らしさのパターンを構成するのは、表情と声色のカップリングだが、AIによるディープフェイクはこれを見事にシミュレートしてみせた（オバマの動画をみよ）。現代の顔は、もはや柔らかく弾力のある表情ではなく、高度に計算されたデジタルの顔貌である。顔が肉体を離れ、画像化する（あまつさえコンピュータによって偽装される）。一つの顔の固有性は喪失し、あるいはオンラインコミュニケーションにとって顔の固有性はさほど重要ではなくなる。私はこれを試しに、コミュニケーションの「ポスト・アウラ」的状况と呼んでみることにしたい。「ポスト・アウラ」とは、顔のような生体パターンによってもたらされる個性と、複製技術とが、結びつくことで生じるパラダイムだ。かつてベンヤミンは、複製技術時代の芸術が一回性/此性を喪失したと唱えた。私たちは、再び、アウラを失うだろう

う。顔のアウラを失う。顔によるコミュニケーションの優美な一回性を喪失する。（誰かの顔を、Web会議アプリで見た、あの顔を想起してみよ）

極めて単純に換言すれば、これは対面コミュニケーションの危機である。これまでオンラインのコミュニケーションは、物理的接触や密集と相補的に働いていた。しかし、感染症抑制のための隔離は、密集を避け、コミュニケーションをオンラインへ限局するよう迫る。「いま・ここ」でしか成し得ないコミュニケーションのアウラは失われ、私たちはスポイルされる。あるいは、新しいコミュニケーションの可能性を、新しい顔を、オンラインにおいて、あるいは別の媒体性を介して、再発見せねばならない。美術を志す者として、いま「顔」とは何か、問うてみてほしい。